

ドキュメント 進路指導

6

生きる力を養うための指導法を模索する教師の足跡

D V O E

W C U M

E N T

栃木県立

石橋高校

体験学習

鳥取県立

浜田高校

体験学習

職場での体験学習

を目前に控
えた平成9

年10月下旬、進路指導部の三品勝弘先生は、2年生の学年集会で生徒たちとこう話しかけた。

「今回の体験学習が成功するかどうかは、私にも予測できません。この行事の成否は、皆さんが職場体験を通して、なにを感じ、なにを得るにかかっています。どうかその成果を、帰ってきたあとに私たち教師に教えてください」

栃木県立石橋高校が、職場での体験学習を実施したのは、平成9年度が初めてのことで、2年生247名全員がさまざまな職場に赴き、1日だけその仕事を体験するというものである。受け入れてくれた職場は、一般企業から官庁まで多岐に渡り、約60箇所上った。普通科高校が職場体験を、これだけの規模で展開するのは極めて珍しい。なぜ大規模な職場体験に取り組むのか。三品先生は、個人面談などを通して生徒と接するうちに、実社会を体験させることの

必要性を感じるようになっていった。

「志望動機があまりないまま学部・学科を選んでる子が多いんです。例えば、推薦入試に向かう3年生に『なぜこの学科か』と尋ねても単なるあこがれであったり、安定的な大企業に就職したいからといった答えが結構多いんです。実際の仕事や職場がどんなものなのか把握できていないから、将来に対する思いも希薄なものになっているんじゃないか」

この行事に教師全員で協力してあたる。短期間で体験学習を実施できたのは、教師間の協力体制があったからと、三品先生は振り返る。



石橋高校

栃木県立

少人数の 職場体験で 1対1の交流を図る



石橋高校では、1年次を職業研究、2年次を学部・学科研究の時期と位置づけている。職業研究では、自分の興味のある職業の仕事内容や、その職業に就くためにはどんな学問を学ばなければならぬのかなどを調べる。だが生徒の中には、「先生が研究しなさい」というからやっている」といふ様子の者も少なくないし、資料を読んでレポートにまとめさせるだけでは、その仕事の本当の姿についてまでは、なかなか思いを行き届かせることができない。生徒の進路意識、職業意識を高めるには、もう一歩踏み込んだ試みが必要であると三品先生はずっと考えていた。

7月の職員会議

三品先生はほかの先生方を前にして、体験学習の必要性を訴えた。

「生徒たちには、体験を通して進路観を養う機会が不足しています。そこで生徒に、1日だけ職場体験をさせる機会を持たせたいと思います。できれば、今年の秋には実施したいんです。年度半ばになって新しい行事を取り入れるのは、石橋高校でも異例なことだ。だが先生には、決意した以上はすくなくでも実行したいという気持ちが強かった。ほかの高校の事例を調べてみると、バスをチャーターして団地で工場や研究室を見学するといった例が一般的だった。でもそれでは生徒は職場の方の説明を一方的に聞くだけ。もっと生徒を真剣に仕事に向かわせるにはどうすればいいのだろうか。そんなときに思いついたのが、4名から6名くらいに生徒を振り分け、実際に職場で働かせるというやり方だ



栃木県立石橋高校進路指導主事
三品勝弘
Mishina Kazuhiko

平成5年に石橋高校に赴任。昨年度より進路指導主事を務める。山岳部の顧問も引き受けており、忙しい毎日を送っている。担当教科は英語。

った。これだと生徒と職場の方が1対1で「ミニケース」をとる機会が増え、生徒は実際に体を使いながらその仕事を理解できる。

ほかの教師も体験を通して進路観を養う機会の必要性を感じていたのだろう。企画は年度半ばの提案にもかかわらず、職員会議で了承され、進路指導部と2学年の担任団が中心となり、実施に向けて準備を始めることになった。

そもそも石橋高校には、一つの行事に対して教師がお互いに協力して行うというムードがあった。例えば、同校では推薦入試志望の3年生の生徒のために、全教師が小論文か面接のどちらかの指導にあたる。その指導体制は、まず3年の担任を除く教師が担当し、生徒のレベルが合格段階にまで近づいてきたら、進路指導部の教師があとを引き継ぐ。そして試験直前の最終チェックは、その生徒の担任が担う。何人も教師がスクラムを組んで1人の生徒に向き合うことで、その生徒を複眼的な視点から指導できる。また小論文や面接指導は、国語科の教師や担任ばかりに役割が回りがちだが、全教師で取り組むことで個々の教師の負荷も軽減される。

「1人の教師だけの負担が増える形は避けなくてはなりません。また進路指導部が細かいやり方まで決めてそれを押しつけるのではなく、教師が創意工夫を發揮できる緩やかさを持たせることも大切です。小論文も面接指導も、実際に生徒をどのように指導するかについては、教師1人ひとりのやり方に委ねられています」

職場体験の実施に向けて、受け入れ先を見つ

けるため、進路指導部と2学年の担任団は考えられる人脈をすべてたどった。当時2年2組の担任をしていた吉沢正光先生は「3つ語る。」

「三者面談のときに保護者の勧め先を教えてください。そこでぜひ受け入れてくださるようお願いしたこともあります。アポイントメントがとれたあとは、先方の担当者の方と日程参加人数、体験内容、当日の服装、集合場所などを詰めていきました。だいたい1人の先生が7、8箇所を担当しました。」

受け入れ先探しを行う際に頼りになったのが、同窓会と商工会議所の存在だったという。特に同窓会は「後輩のためなら」と積極的に動いてくれ、東京電力や銀座東急ホテル、文部省など、遠く東京にある企業や役所まで協力してくれることになった。そして受け入れ先は、教師側の予想を超えて約60箇所にも上った。

「企業にとっては直接のメリットは全くないにもかかわらず、趣旨を説明すると、ほとんどの職場は好意的に受け取ってくれました。ただし、悩んだのが実際に生徒たちにとどのような体験をさせたいのかという点。学校も企業も初めてのことでノウハウがありませんし、仕事内容は職場によってまるで違います。話し合い

書きますから、間違えたらもう一度最初から取り組まなくてはいけません。最高7回、満足できるまで書き直している生徒がいました。」

生徒が学外で活動する機会は、部活動での試合や修学旅行など、年に何度かはある。だがそれらの行事と体験学習が決定的に違うのは、前者では教師が同行し、その指示に従って行動すればいいのに対し、後者は生徒自身の自己責任において判断、行動しなければいけない点だ。なにしろ訪問先は約60箇所もあるため、教師がすべてに同行することは不可能である。生徒が自分で職場を訪問し、職場の



初めて接客の深いところまで体験してみることができ、今まで気づけなかったところも見える。

売

ながら一つ一つ決めていくしかありませんでした。9年度2学年担任・黒川昌子先生、小林武夫先生)

初めての経験なのは受け入れ先との交渉ばかりでなく、生徒への事前指導の面でも同様である。実施までの行程は、「どうすれば生徒が自分で動けるか」という視点で三品先生は2学年の担任団と話し合いながら生徒に向かっていった。

「学年集会で生徒の体験学習の意義を訴えてみようとか、生徒1人ひとりに挨拶状を書かせて各受け入れ先に送ってみようとか、その都度2学年の先生方と話し合いながら決めていきました。完全な見切り発車でしたね。(三品先生)」

受け入れ先への

生徒の割り振り、生徒たちに興味・関心や進路希望に基づいて、体験したい職場名を第3希望まで提出させて決めた。職場の中には、旅行代理店やマスコミなど高校生に人気のある業種ばかりでなく、体を使う地道な作業を必要とする所もある。興味本位で華やかな職場にばかり人気が集まったり、希望先を友達同士で決めたりといったことが心配されたが、生徒は意外なまでにまじめで、希望する進路と関連づけながら決めていたという。そして訪問

方から直接指示を受けたり、生徒が自主的に質問をしたりすることになる。

「生徒を手放すのは確かに不安です。でも、教師が同行しないと、生徒も自立せざるをえないんです。普段は頼りない生徒たちも、あつときは立派に見えました。生徒の自主性を養う点でも、貴重な体験といえますね。(9年度2学年担任・橋川睦子先生、加藤雅彦先生)」

平成9年度の

石橋高校の体験学習は、11月から12月中旬に、各職場において実施された。

小山信用金庫で働いた生徒は、普通預金入金票や定期預金入金票の作成作業を経験した。銀行という接客業務が中心と思っていたが、外回りの営業職も重要であることを知った。また店頭でのシャッターが降りれば仕事が終わるのでなく、そのあとモーターを持って忙しく伝票計算をする行員の姿を初めて目にした。

雪印乳業の生物科学研究所で体験学習をした生徒は、微生物の培養実験やDNAの抽出実験にチャレンジした。研究所員の仕事は実験やデータ分析ばかりでなく、資料を読み込む機会も多いこと。その際には英語の文献が多く、英語力が不可欠であることも知り、「生物だけを勉強していればいいのではなく、さまざまな能力が要求されるんだ」という思いを強くした。

文部省には6人の生徒が職場体験に訪れた。初等中等教育局で文部省の組織や仕事内容に関する説明を受けたり、データの集計作業や電話番などの作業に従事した。対応をした初等中等

ホテルでベッドメイキングの作業を体験する。職場の人々と交流し、実際に体を使いながら生徒はその職業を理解していった。



先が決まったあとは、会社案内などの資料を見ながら、各職場の事前調査を行い、その職場に関する質問票を作成させた。日程が近づいてくると、生徒がやる気になっていっていかのを感じられた。2年6組の担任をしていた古家正夫先生は、事業所あてに挨拶状を書く生徒の姿を見て、この企画の成功を確信したという。

「HRを利用して挨拶状を書かせたのですが、普段はおとなしく席に座っていないような生徒も、授業ではなかなか見せない真剣な顔で使せんに向かっているんです。ボールペンを使って

教育局職業教育課の鹿嶋研之助さんによると、生徒たちは慣れない中央官庁の雰囲気や飲まれたのが、緊張感でいっぱいだったという。「たぶん生徒たちには、仕事内容を理解するだけの余裕はなかったでしょうね。職場体験は1日だけだと緊張だけで終わってしまいがちですから、本当は3日くらいあるといいですね。ただし、たとえ1日だけだとしても、意義はあると思いますよ。学校という狭い世界しか知らなかった子どもたちが、社会と直接接することができる、数少ないチャンスですからね。」

わずか1日で仕事のすべてを理解することはできない。だが、一つの仕事はさまざまな職種に就く人の協力によって成り立っていること、そんな中で自分は何にしたいのか、なにに向いているのかを考えることが大事だと気づく一つのきっかけにはなるはずである。

体験学習が終わったあと、教師に嬉々とした表情で報告をする生徒たちの姿を、廊下や職員室などで見ることができた。1日の体験が単なる思い出以上のものとして蓄積されているかどうかはわからない。だが石橋高校の教師たちは、生徒の進路意識や職業観を高めるうえで、なにかの形でプラスになっていることを信じている。

今年度の体験学習は1年生が対象。1学年主任の青木一男先生は「実際に担当した先生方は実に熱い思いでやっていたんですね。私たちもがんばります」と思いを語る。きつと1年生たちも生き生きとした表情で、教師に自分が体験してきたことを話すのだから。

10月13日、

鳥根県立浜田高校の会議室と題された学問探検学習会が開かれていた。講師として招かれたのは、鳥根大法文学部心理学研究室の松川順子教授。参加した生徒たちは、心理学もしくはその隣接分野への進学を志望している2、3年生が中心である。「心理学博士の研究」は、本来なら8月中に行われる予定だったが、浜田高校が夏の全国高校野球選手権大会で準々決勝まで勝ち進み、その応援などで忙しかったこともあり、この日まで延期されていた。待ちに待った学習会には50人前後の生徒が集まり、心理学に対する関心の高さをうかがわれた。進路指導部長の大矢幸雄先生はこう語る。

「生徒たちの間で心理学に人気が出たのはここ2、3年のことです。個人面談をするとき将来はカウンセラーになりたい、大学では心理学を専攻したいという生徒がいます。もしかしらば、自分自身の心の問題を抱えている生徒が多いということかもしれません。ただし、生徒たちが本当の意味で学問としての心理学を理解しているかというと、それは疑問です。テレビや雑誌で得た知識ではなく、大学で研究している先生の話を通して生徒たちに心理

「うちの大学の中にもカウンセラーを志望する学生はいます。でも実は彼ら自身も心の問題を抱えているというケースが少なくありません。人を援助するのがカウンセラーの仕事なのに、自分が助けられたいというようでは、カウンセリングを受ける相手に対しても失礼です。カウンスラーを志望するならば、まずその点を覚悟しなくてはなりません。また、カウンスラーを

島根大学の教授を招いての心理学に関する学問探検学習会。学問内容、研究に求められる姿勢などを第一線の研究者から聞くこの会には、約50人が集まった。



浜田高校

生の情報を得られるしかけを 多彩に展開



学を理解させたいと思い、学習会を開くことにしました。もし教授の話聞いて『私のやりたいことと違う』と感じて進路変更する生徒がいたとしてもいいぐらいに考えています」
学習会の中で松川教授は、行動心理学や生理心理学といった心理学の諸領域がどういった考

やっていると、相手からイヤな言葉を投げ掛けられることもあります。それを冷静に受けとめて分析できるようにするためには、何年も専門的な訓練が必要になります」
松川教授の説明は、時々専門的な用語が入るため、生徒たちには難しい部分もあったかもしれない。しかし、心理学に携わるときの取り組み方や心構えなどのエッセンスについては、生徒たちも感じることができたはずだ。

学問探検学習会を

浜田高校が実施する

のは、今回の「心理学博士の研究」が初めてではない。今年7月27日には鳥根大総合理工学部電子制御システム工学部の泉照之教授を招いて、「ロボット博士の研究」を開いている。内容は、最初の1時間が1年生理科の生徒向けの「研究者の苦勞話」。次の1時間が2、3年生の理・工学部志望者を対象とした「総合理工学部の概略説明」と「電子制御と情報・周辺学科との関連」についての話だった。

学問探検学習会以外にも、浜田高校では進路指導部が学年会や教科と連携しながらさまざまな行事に取り組んでいる。ざっと挙げてみるだけでも、介護・福祉体験、看護体験、保育体験、企業への職場見学、大学の講義体験会、教育実習生と生徒による質疑応答会などがある。

「やれることはなんでもやってみようというのが方針です。他校の取り組みに関する情報収集を怠らず、本校でもできそうなものがあれば、積極的に取り入れてます」と、大矢先生は語る。



鳥根県立浜田高校進路指導部長
大矢幸雄 Ohta Yukio
昭和21年鳥根県生まれ。
出雲高校、松江南高校を経て、
平成6年より
浜田高校で教壇に立つ。
担当科目は地理。

え方の基に成り立っているか、心理学という学問に対してどのような姿勢や心構えで臨めばいいかといったことについて、特に時間を割いて話していた。例えば、生徒たちの中で最も人気のあるカウンセラーについての説明は、こんな様子である。

大矢先生が12年間勤めていた松江南高校を離れ、浜田高校に赴任したのは平成6年のことである。実は浜田高校は大矢先生にとって、昭和45年に大学を卒業して、初めて赴任した高校でもあった。そのときのイメージを抱いて再び同校にやってきた先生は、当初は生徒の質の変化に戸惑ったという。

「浜田高校は県西部で最も伝統があり、いわゆる進学校として知られていました。ところが、久しぶりに浜田高校に戻ってきてわかったのは、難関国立大志望者から専門学校や就職希望者まで、生徒の進路が多様化していること。もちろん学力の方も、上位層から下位層までばらつきがめだちます。そしてもう一つが、進路意識の希薄さです。非常に短絡的に進路を決めてしまっている生徒が多いんです。例えば、英語を勉強したいという生徒にその理由を聞くと、『スチューデスになりたいから』と答える。英語さえできればスチューデスになれると思っ込んでいて、もっと突っ込んで英語や職業に関する探求を続けようとはしないんですね。そこで、教師の側がもう少し細かく指導していかないと、生徒は適切な進路を選びとることができないのではないかとこの危機感を持ちました。もちろん生徒の進路は多様化していますから、それに対応した指導が必要になります。だからこそ、たくさん行事に取り組むことにしたんです」
大矢先生のこう思った思いに、進学指導のベテランであった当時の教頭も全面的に賛同した。そして浜田高校では、現在さまざまな行事が進

行中だが、重視しているのは「生徒が実際に体験する機会を多く持たせる」ことである。今の生徒たちはたくさん情報を入手するチャンスには恵まれているが、実際の現場はどうなっているかを意外と知らない。そのため、イメージだけで進路を選びがちである。そんな生徒たちに、生の体験、生の情報を得る機会を少しでも持たせたいというのが教師の思いである。冒頭に紹介した「心理学博士の研究」は体験学習ではないが、生徒が生の学問に触れることができる貴重な体験といえるだろう。

大矢先生が

進路指導部長になったのは、浜田高校にやってきて2年目の平成7年度からのことである。

進路指導部長になってまず最初に手がけたのが、1日介護・福祉体験、1日看護体験の実施である。鳥根原は高齢化が進んでいることもあり、浜田高校でも医療・福祉・看護系の大学、学部、専門学校を志望する生徒は数多い。だが教師の目から見ると、志望者の中には「この子は本当に福祉や看護の分野に向いているんだらうか。ただなんとなくやりたいかと思ってるだけではないか」と疑問を持つような生徒も含まれていたという。人を相手にした仕事は必ず

のに、無口で人と接するのが苦手であったり、気遣いが足りなさそうだったり……。そういう子でも、体験をする中でなにかに気づいて変わってもらえれば一番だし、あるいは、福祉以外の進路を考えてみるきっかけになってもいい。

「さっそく浜田市内にある社会福祉協議会の総合福祉センター、特別養護老人ホーム、国立浜田病院などに連絡をとって協力を仰ぎました。最初は相手側も経験がなかったため戸惑うことも多かったようですが、趣旨を理解し、好意的に受けとめてくれました。アポイントメントには全く苦労しませんでしたね」

現在では、5、6月が総合福祉センターでの介護・福祉体験、7月が病院での看護体験と特別養護老人ホームでの介護体験というように、年間行事として取り込まれている。体験学習に参加できる生徒は、医療・福祉・看護系を志望している全学年の生徒、参加できる学年を制限していないため、希望者は卒業までに何度も体験できる点特徴である。ただし施設側の受け入れ人数に制限があるため、定員オーバーの場合は上級学年の方が優先となる。

「体験後に進路を変更する生徒もいるかと思っていたのですが、ほとんどの生徒が福祉・看護の企画段階から運営まで、かなりの労力が必要ではないかと想像できるが、大矢先生は「そんなに大変ではないですよ」とあっさり否定する。「なにか新しい行事を立ち上げるとき、全体で討議して各々の役割を決めてからスタートするやり方と、とりあえず数人で始めて、道ができた段階で違う人に役割を譲るやり方と、二通りがあると思います。私が選択したのは後者の方。こちらの方がずっとスピードに物事を進めることができますからね」

例えば介護・福祉体験も、最初の年は大矢先生と数人の教師が企画し、施設との交渉を行った。途中からほかの教師にも協力してもらいながら交渉のしかたなどを学んでもらい、そしてノウハウが蓄積された2年目以降は、ほかの教師に担

医療や福祉、看護に関する学問を志す生徒が多い同校では、1日介護・福祉体験などの取り組みを積極的に行っている。

心理学博士の研究

や「ロボット博士

の研究」などの学問探検学習会。1日介護・福祉体験、看護体験、保育体験、教育実習生と生徒による質疑応答会、企業の職場見学や大学の講義体験会。これら以外にも同校の進路指導部では、専門学校進学や就職希望者を対象としたパソコン技術指導「合格体験記」の作成などを行っている。他校と比べても、かなりたくさん

教育実習生との質疑応答会では、生の大学、学部・学科情報を得ようと、生徒たちは熱心に実習生に質問をした。



護分野への思いをますます強くして帰ってきます。人と接する仕事の魅力を、なにかつかんだということでしょうね。介護や看護体験ばかりでなく、児童教育関係の志望者を対象とした1日保育体験も始めています」

そのほかに浜田高校が取り組んでいるユニークで、しかも比較的手軽な行事としては、教育実習生への質疑応答会がある。教育実習生は大学案内や進路情報誌には書かれていない生の大学、学部・学科情報を持っている。これを有効

1年生	6月	介護・福祉体験 / 合格体験記を読む
	7月	看護体験 / 特別養護老人ホーム介護体験
	9月	進路講演会
	1月	進路講演会
2年生	6月	学部・学科学習会 / 合格体験記を読む
	7月	看護体験 / 福祉体験
	8月	県内企業・大学見学会
	9月	進路講演会
	2月	進路講演会
	3月	学校見学会参加
3年生	5月	介護・福祉体験
	6月	合格体験記を読む / 教育実習生への質疑応答会
	7月	看護体験 / 特別養護老人ホーム介護体験 / 保育体験
	8月	受験校の見学
	9月	就職希望者面接指導
	10月	パソコン学習会 / 私立大推薦入試面接指導
	11月	国公立大推薦入試面接指導

浜田高校の取り組み

いというわけではありません。一番考えるのは、教師のしかけに生徒が本当に乗ってきてくれるかどうかということですね。教師だけが空回りして、生徒の方は冷めた目でその行事に参加しているようでは失敗です。また、どの学年の何学期に実施するかといったタイミングも大事ですね」

アイディアは出されたが、まだ実現していない行事としては、卒業生が働いている職場の訪問、卒業生による進学・就職体験談話会などがある。生徒の進路意識、職業意識を高めるために、大矢先生の模索は続いている。



当をお願いした。こんなふうにして、次々と新しい行事を立ち上げていったのだ。また、学問探検学習会などで大学の教授に講師を依頼するときは、大学を通ずることはせず、人脈を活用して直接教授にお願いしたという。その方がスムーズに話が進むからだ。「もちろん、なんでもい